

ピリピ人への手紙2章1-11節 「へりくだって一つとなった方」

1A へりくだりにある一致 1-4

1B キリストにある励ましと慰め 1-2

2B 同じ思い 3-4

2A キリストにある思い 5-11

1B 人となられた方 5-8

1C 他者思い 5-6

2C しもべの姿 7-8

2B 高く上げられる神 9-11

1C 父なる神のわざ 9

2C 神への栄光 10-11

本文

ピリピ人への手紙 2 章を開いてください。私たちが、主のご降誕を覚える時に、ちょうどピリピ人への聖書通読の学びが 2 章に来たことは幸いなことだと思いました。いつもは、取り上げる聖書箇所は、イエス様がお生まれになったマタイ 2 章やルカ 2 章ですが、ピリピ 2 章の前半、1 節から 11 節は、このことがどのような意味を持つのかを明確に示しており、かつ、私たちキリスト者にどういう意味を持つのかを、はっきりと伝えています。

それを一言でいうならば、週報に説教題を載せましたように、「へりくだりによって一つとなった方」です。私たちが、家畜小屋に、飼葉おけに眠っているイエス様の姿を思い浮かべて、ロマンチックな思いになっているだけとしたら、意味をはき違えています。そうではなく、天地を造られた神ご自身の御子が人となるという、とてつもないへりくだりにあります。そして、主は人々の間でもへりくだっておられて、人々に仕えられ、ローマによる十字架刑を受けられました。十字架は、激痛の痛みだけでなく、公然と辱めを受ける道具でした。そこまでへりくだられたので、この方が、神でありながら人でもあり、神と人をつなぐ仲介者となることができました。神と私たちの間にある隔たりが、キリストにあって取り去られました。へりくだりによって、神と人が一つになるのです。

そして、私たちが知るべきは、キリストのこの愛を知っているならば、私たちがキリストの思いをもって、へりくだることによって、互いに一つになることができるというものです。

1A へりくだりにある一致 1-4

1B キリストにある励ましと慰め 1-2

¹ ですから、キリストにあって励ましがあり、愛の慰めがあり、御霊の交わりがあり、愛情とあわれ

みがあるなら、² あなたがたは同じ思いとなり、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、思いを一つにして、私の喜びを満たしてください。

パウロは、ピリピの人たちを励ましています。彼が今、牢に入れられていても、それでも主が、福音を広げるのに、その状況を用いられていることを伝えました。この苦しみにあっても、主がみこころを行っておられることを知り、喜んでいました。ただし、そのようにみこころを見分けることができたのは、彼自身がキリストを喜びとしていたからです。「1:21 私にとって生きることはキリスト、死ぬことは益です。」彼にとって、キリストとその福音が人生において第一になっていたのも、その他の事柄で煩わされることが少なかったのです。苦しみにあっても、そこにキリストがどのようにおられるのか？という思いを抱くことができ、そこで親衛隊に福音が広がったことを見ました。

私が、先週と今週、ウクライナの教会の人々が、戦禍にあっても福音が飛躍的に広がっていることを報告しましたが、このようにキリストの福音が第一になっていると、神が何をなさっているかを見ることができ、それで喜ぶのです。

それからパウロは、本題に入ります。自分も苦しんでいますが、ピリピの人たちも苦しんでいました。迫害があり、また生活も困窮していました。そのような苦しみの中で、教会に対立が起こっていました。女性の二人の働き人が不一致になっていたのです。それで、彼は思いを一つにするための勧めを始めます。それは、人為的に、機械的に、規則を作って一つになるものではなく、キリストを第一とするところから、その他のことは二義的なもの、大切なんですけども、最も大切なものではないことを悟ることができます。霊において、福音の信仰のために心を一つにして戦いなさいと勧めます。戦いに必要なのは、思いが一つになっていることです。そうすることによって、初めて反対者に対峙することができます。

それでパウロは、彼らに対して語り始めているのが、今、読んだ1節と2節です。ピリピの人たちは、1節にあるように、キリストにあって励ましを受けていました。またその愛によって慰めも受け取っています。そして、御霊の交わりもありました。これは、自分の知性では思いもよらないことも、御霊が助けてくださるところの交わりです。例えば、どう祈ればよいか分からない時も、御霊が言いやうもないうめきによって、私たちの弱さを助けて下さり、みこころにそって執り成して下さることが、ロマ 8 章で約束されています。そして、彼らには愛情と憐れみがあります。パウロは、それらのことをよくみていたし、彼らの贈り物に現れている霊的な実は、彼らがいかに愛情と憐れみがあるかを示しています。

ところが、そのことが一人一人は抱いていたけれども、互いに共有していなかったのです。同じ思いになっていませんでした。「あなたがたは同じ思いとなり、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、思いを一つにして」と言っています。私たちは、キリスト者としてそれぞれ個々人が、キリストにある交

わりをしていると自負します。けれども、それを分かち合うということが十分にできていないことがありますね。自分独りは良くても、他の人々に対しては心に壁を持っている。私たちはしばしば、キリストをまだ知らない人は、独りよがり、自分のことしか求めていないと思っていますが、実は、キリスト者は、キリストにある励ましや慰め、御霊の交わり、愛情や憐れみがあるのに、自分自身のことを求めていることがあるのです。

そうすると、どうなるでしょうか？「私の喜びを満たしてください」と、パウロはお願いしています。パウロは、主にある喜びがあるけれども、彼らが思いを一つにしていることによって、その喜びを満たしてほしいとお願いしています。それぞれが、同じ場所にいるのに、キリストにある愛を分かち合えない、まるで、それぞれ心に仕切りを造って、小さなカプセルホテルのようなところで、ばらばらになっている、ということがあるのです。そうすれば、交わりにある喜びがなくなり、主にある喜びが半減するのです。

2B 同じ思い 3-4

そこで何が大事でしょうか？1章では、キリストとその福音を第一にしていることで、主を喜ぶことができる、と学びました。ここ2章では、「自分のことは差し置いて、他者のことを思う。自分を他者のために従わせる。」ということです。

³ 何事も利己的な思いや虚栄からするのではなく、へりくだって、互いに人を自分よりすぐれた者と
思いなさい。⁴ それぞれ、自分のことだけでなく、ほかの人のことも顧みなさい。

「何事も利己的な思いや虚栄からするのではなく」と言って、パウロは優しく諭しています。キリストを第一にしていれば、この方のすばらしさに圧倒されて、自分のことなどどうでもよくなることは、先週、お話ししました。そこでキリストの思いが自分に入ってきます。自分のことはどうでもよくて、キリストがあがめられることに思いをはせているので、自分が大事にしていることや、思っていることも、柔軟に対処し、譲歩することができます。もちろん、自分の意見や主張を言わなければいけない時は言いますね。でも、それは、大したことではないけれども、という前提が念頭にあれば、利己的な思いや、虚栄から守られます。

そして、「へりくだって」とお願いしていますね。へりくだる、とはどういうことか？これから、キリストにある、へりくだりの思いを見ていきますが、それは私たちの考えるものとは大きく違います。へりくだりは、「自分のことを卑しく思う」ことではありません。私はだめだ、私にはできません、とか、そういったものは、全然へりくだりではありません。

王サウルのことを思いますが、彼が王として選ばれた時に、荷物の中に隠れていて、それがへりくだりというものではありませんでした。神が彼を選ばれたのであれば、へりくだることは、むしろ、

その召しをしっかりと受け止めて、自分の能力ではなく、神に従順になるために人々の前に立つのです。案の定、彼は、神の召しをしっかりと受け止めなかったため、自分自身で王位が保たれていると思ひ込み、それで高ぶって、自分のことばかりを考えたのです。ダビデは、ゴリアテに対して大胆でした。彼は、自分が少年であるかどうか、どうでもよく、自分たちのイスラエルの神の御名をゴリアテが冒瀆したことに対して、怒りを持っていたのです。これこそが、へりくだっているのです。

へりくだりとは、「キリストのゆえに、我を忘れている」状態です。キリストにぞっこんになっているので、自分のことなどどうでもよいのです。そして、キリストにあつて、自分自身をありのままに見られるということです。思いあがることもせず、また卑下することはありません。卑下においては、神の恵みによって自分が今の自分になっているという、神への畏敬をもって、受け入れる姿がありません。神を恐れて、神の恵みに圧倒されていることは、実にへりくだりです。

このへりくだりを持っていれば、キリストにあつて他者のことを思う余裕が与えられます。人は他者を恐れていると、脅威に感じていると、そこには愛がありません。遠慮したり、身を引いたりする時に、それが愛からではなく、恐れて退いていることが多いです。「Iヨハ4:18 愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。恐れには罰が伴い、恐れる者は、愛において全きものとなっていないのです。」愛があれば、「あの人は私のこと、どう思っているのか？」などと気にする暇はなく、「その人は大丈夫かな？ 主にある励ましが必要かな？」と、相手のことを気にして、祈ったり、励ましたり、仕えることができます。

まず、「互いに人を自分よりすぐれた者と思いなさい」とパウロは勧めています。私たちは、他者を思う余裕ができる時に、心が広くなります。いろんな見方で、相手を見ることができます。自分のこれまでの思いでは、「ああ、この人だめだな。」と思っていたけれども、思い直してみると、「そんなことはない」と思える側面が見えてきます。また、自分自身が何様なのか？ということを出すことも大事ですね。罪人であるのに、それで救われて、キリスト者の交わりに入れていただいています。それなのに、自分はこれだけのことをやっているとか、何者かのように考えていたら、人々を見下げることはあっても、見上げることはありません。

2A キリストにある思い 5-11

1B 人となられた方 5-8

1C 他者思い 5-6

⁵ キリスト・イエスのうちにあるこの思いを、あなたがたの間でも抱きなさい。

キリストご自身のへりくだりの思いを、あなたがたの間でも抱きなさい、ということです。ここから、クリスマスの真髓の話になります。ベツレヘムの家畜小屋の飼い葉おけに寝ておられるイエスの

ところに羊飼いが来ました。そして場所を移して、誰かの家にいたヨセフの家族のところに、東方からの博士、賢者たちが来ました。彼らはみな、この赤ちゃん可愛い！この小さな子可愛い！としなかったのです。礼拝しました。賢者たちは、その国で最も高価なものの一つを贈り物として献上しました。天地万物の神の御子(おこ)を見て、この方がユダヤ人の王として来られることを知っていて、それで礼拝を献げたのです。王の王、主の主のただ独りの継承者であります。しかし、みずぼらしい家畜小屋、貧しい家庭の中で生まれた子であったのです。この対照的な姿に、まさにキリストの思いがあります。それを私たちの間でも抱きなさいとパウロは勧めています。ちなみに、6 節から 11 節は、初代教会において礼拝賛美の中で歌われていたものだそうです。

⁶キリストは、神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられないとは考えず、

キリストの思いとは、自身にあり方を捨てられないとは考えなかった、というところから始まります。ベツレヘムで赤ん坊として生まれる前のことです。その時にすでに、自分のあり方を捨てることをお考えになっていたのです。

ここで大事なのは、新改訳が良い訳をしていますが、「神の御姿」という姿という言葉を使っていることです。それに対して、「神としてのあり方」と「あり方」と訳していることです。ここの姿というのは内的な性質です。私たちが人の性質を持っているのは、いつまでも変わりませんね。そのあり方はいろいろ変わりますが、お母さんのお腹の中にいる時は胎児ですが、生まれたら乳児です。幼児となり、少年少女となり、青年となり大人になります。そして中年、高齢者となっていく、その姿は変わっていきます。けれども、胎児の時から老人に至るまで「人」であることに変わりありません。それと、ここでの「姿」と訳されているのは、同じことです。キリストは神ご自身だということです。「ヘブル 1:3a 御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。」とあります。

ところが、「神としてのあり方を捨てられないとは考えず」とあります。これは、今、お話ししました、外の姿です。神であられることは全く変わらないが、そのあり方、創造主であり主権者であり、全知全能であり、どこにでもおられる方であり、そういったあり方に固執されなかった、ということです。なぜか？「他者のことを顧みるために、自分の姿を捨てる。」ということです。神が人のことを思い、それで神のあり方をお捨てになったのと同じように、私たちが与えられている力や権利、その立場について、他者を顧みるために、それらを自分のために使うことを否む、ということであります。

イエス様が、悪魔から誘惑を受けられた時のことを思い出してください。彼は、イエスが神の御子であることを知り尽くしていて、それで誘いかけたのです。40 日間、食べることも飲むこともしなかったイエス様に対して、「石ころをパンに変えなさい、神の子なのだから」と誘いました。イエスには、これがおできになったのです。しかし、主はご自分のためにその力を用いられませんでした。

嵐で湖の船が翻弄していた時、それを弟子たちのために一瞬にして風にされましたが、ご自身のためには用いませんでした。同じように、神殿の頂から落ちて、御使いに命じて助けられることもできましたが、用いませんでした。ご自身が人々の前で驚くべきわざをされる時は、ご自身ではなく人々が神をあがめるため、人々が信じるためでした。そして、すべての世界の栄華も見せられましたが、それはご自分に属しているものですが、その世界にいる人々が信仰に富むために、ご自身は貧しくなられたのです。

そのキリストの思いを抱いて、私たちが互いに他者のことを思いなさいということです。自分のことを主張して、自分のことを行うのは、全く自由で、当たり前持っている権利であります。他者のために使わなくとも、全く責められることはありません。けれども、愛ゆえに、他者のことをもうゆえに、その権利を主張しない、自分のあり方を捨てるのです。かえって、自分の持っている権利やあり方を、他者の利益のために使っていくということでもあります。

2C しもべの姿 7-8

⁷ ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、人間と同じようになられました。人としての姿をもって現れ、

ここに、クリスマスの心があります。神の御姿である方が、ご自分を空しくして、しもべの姿を取られました。そして人間と同じようになられたのです。赤ん坊としてマリアの胎から生まれます。

ここで、「ご自分を空しく」というのは、仏教のような「無の境地」とかそういうものではありません。父なる神に信頼し、この方の御心に従い、そして他者を愛していくなかで、ご自分のことを忘れてしまう、ということです。医療機関で働いている人が、大地震が起こって、自分自身も骨折しているのに、次々と運ばれてくる患者の対応に集中していたので、骨折していることを忘れて働いて、少し時間ができてようやく、その痛みに気づいた、なんていう話がありますね。そうしたことであります。

そして、「仕える者の姿」を取られました。すなわち、それを実際に奉仕、仕えることによって示したということでもあります。ただ思いの中のことでなく、実際に手足を汚して動かして働く、ということです。ゆえに、「人としての姿をもって現れ」とパウロは、再度、キリストが人間と同じようになられたと強調しているのです。そこには、単なる思いだけは人に向かっていたのではなく、具体的に動いていたのです。イエスは、生まれつきの盲人を見て、そして、ご自分のつばきで泥を造り、それを目にあてがいました。そして、癒された盲人を待っておられて、サンヘドリンから追い出された空のところに行き、彼がイエスを神の子として知るところまで導かれたのです。

イエス様が、ご自身が動かずに仕えてもらうことはなくても、動いて仕えておられました。主が弟子たちに言われました、「マルコ 10:45 人の子も、仕えられるためではなく仕えるために、また多く

の人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのです。」そこでは、弟子たちが、誰がイエス様の王座の右と左に着くことができるか、と議論している中で語られたことでした。これが、キリストの思いです。利己的な思いや虚栄に弟子たちが陥っていた中で、ひたすら仕えておられました。また、自己保身の中でも仕えられました。最後の食事において、足を洗う人が弟子たちの中にいなかったところで、イエス様が足を洗われたのです。私たちの間で、このキリストの思いがあるかどうか？であります。

⁸ 自らを低くして、死にまで、それも十字架の死にまで従われました。

キリストの思いは、犠牲を払うところまで至っています。初めに、自分のことを忘れて他者のことを思っています。次に、手足を使って仕えます。そして、今ここでは犠牲を払うということです。今は、いかに犠牲を払わないで効率的に物事を進められるか？という思いが満ちている世の中です。私は、婚活をしている情報で、いかに損をせずに相手を選べるかというアドバイスに満ちているので、驚いています。それでは愛ではないでしょうか？愛は、与えるものです。犠牲があるから、愛があるのです。イエスが赤ん坊としてお生まれになったのは、その赤ん坊の血肉がやがて、罪の供え物としての、血肉となるためであったというのは衝撃的です。けれども、そこまでしても、神は私たちが愛しておられるのです。

そして、「死にまで、それも十字架の死にまで」と、パウロが言い直していることも大事です。単なる自然死ではない。ピリピの人たちも、ローマに対する反逆のみせしめとしての十字架をよく知っていました。人々の見ているところで、大通りで、裸にされて、釘打たれて、その苦しみ悶えている姿を見せられて、トイレのお尻ふきに使われているような海綿の棒を突き付けられて、完全に屈辱的な死であります。当時の人々は、「十字架」という言葉も口から出てくるのをためらうような、タブー視されていたような、衝撃のともなった言葉です。ここまで、ご自身を父なる神に従わせました。

2B 高く上げられる神 9-11

そして、次、9 節から 11 節までにあるキリストの思いは、「父なる神の栄光を帰する」ということでもあります。ご自身が仕え、従う姿を取られました。それはみな、ご自分ではなく父なる神があがめられるためです。

1C 父なる神のわざ 9

⁹ それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名を与えられました。

イエス様は、最後の最後まで、父なる神にご自身をお任せになりました。最後のお言葉が、「父よ、わたしの霊をあなたの御手にゆだねます。(ルカ 23:49)」でありました。最後の最後まで、ご自分の力を用いずに、従われたのです。だからこそ、高く引き上げるのは父なのです。主ご自身が、

「だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるのです。(ルカ 18:14)」と言われました。最後まで低くしたからこそ、ご自分ではなく神が高くされたのです。この方を墓の中からよみがえらせ、天にまで引き上げ、ご自身の右の座に着かせました。あらゆる名にまさる名を与えられました。

イエス様は、地上におられる間、「わたしは、わたしの父の名によって来た(ヨハネ 5:43)」と姿勢でありました。父なる神があがめられるように、あらゆることを行われました。そして、主ご自身があらゆる名の上の名が与えられましたが、そのように高められても、父ご自身がそれを行われたので、父の御名があがめられるようになるのです。それが次に書かれています。

2C 神への栄光 10-11

¹⁰ それは、イエスの名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが膝をかがめ、¹¹ すべての舌が「イエス・キリストは主です」と告白して、父なる神に栄光を帰するためです。

終わりには、すべての者が「イエス・キリストは主です」と告白するようになります。それは、生きている時に告白している人は救われるための告白ではありますが、拒んだ人は強いられて、認めたくなくとも、厳然とした事実として、告白します。ここで大事なものは、救いにしても、裁きにしても、父なる神に栄光が帰されるということです。

これがキリストの思いでありました。自分のことではなく他者を顧みる。仕える。犠牲を払う。そして、自分は低くして、神に栄光が帰されるようにする。こうしている中で、思いが一つになっていきます。たかがクリスマス、されどクリスマスです。人々にイエス様が来られたことをキリスト者は伝えている時節ではありますが、私たち自身がクリスマスを自分たちの心にお迎えしたいですね。